

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、この文章は、コペル君という少年に対しておじさんが手紙で語りかけたものである。

僕たちは人間として生きてゆく途中で、子供は子供なりに、また大人は大人なりに、いろいろ悲しいことや、つらいことや、苦しいことに会おう。もちろん、それは誰にとつても、決して望ましいことではない。しかし、こうして悲しいことや、つらいことや、苦しいことに会おうおかげで、僕たちは、本来人間がどういふものであるか、ということを知るんだ。

心を感じる苦しみや痛さだけではない。からだにじかに感じる痛さや苦しさというものが、やはり、同じような意味を持っている。健康で、からだになんの故障も感じなければ、僕たちは、①心臓とか胃とか腸とか、いろいろな内臓がからだの中にあつて、平生大事な役割を務めていてくれるのに、それをほとんど忘れて暮らしている。ところが、からだに故障ができて、動悸がはげしくなるとか、おなか痛が頻りに出るとかすると、はじめて僕たちは、自分の内臓のことを考え、からだに故障の起きたことを知る。からだに痛みを感じたり、苦しくなったりするのは、故障ができたからだけれど、逆に、僕たちがそれに気づくのは、苦痛のおかげなのだ。

苦痛を感じ、それによってからだの故障を知ることとは、からだに正常の状態にいないということ、苦痛が僕たちに知らせしてくれるということだ。もし、からだに故障ができていないのに、なんにも苦痛がないとしたら、僕たちはそのことに気づかないで、場合によっては、命をも失ってしまうかもしれない。実際、むし歯なんかでも、少しも痛まないでどんどんとウ口が大きくなってゆくものは、痛むものよりも、つい手当がおくれがちになるではないか。だから、からだの痛みは、誰だって御免こうむりたいものに相違ないけれど、この意味では、僕たちにとってありがたいもの、なくてはならないものなんだ。——それによって僕たちは、自分のからだに故障の生じたことを知り、同時にまた、人間のからだ、本来どういふ状態にあるのが本当か、そのことをはっきりと知る。

同じように、心を感じる苦しみやつらさは人間が人間として正常な状態にいないことから生じて、そのことを僕たちに知らせしてくれるものだ。そして僕たちは、その苦痛のおかげで、人間が本来どういふものであるべきかということ、しっかりと心にとらえることができる。

人間が本来、人間同志調和して生きてゆくべきものでないならば、どうして人間は自分たちの（②）を苦しいものと感じる事ができよう。お互いに愛しい、お互いに好意をつくしあつて生きてゆくべきもののなのに、憎みあつたり、敵対しあつたりしなければならぬから、人間はそのことを不幸と感じ、そのために苦しむのだ。

また、人間である以上、誰だって自分の才能を伸ばし、その才能に応じて働いてゆけるのが本当なのに、そうでない場合があるから、人間はそれを苦しいと感じ、やり切れなく思うのだ。人間が、こういう不幸を感じたり、こういう苦痛を覚えたりするということは、人間がもと、③

およそ人間が自分をみじめだと思い、それをつらく感じるということは、人間が本来そんなみじめなものであつてはならないからなんだ。

コペル君。僕たちは自分の苦しみや悲しみから、いつでも、④こういう知識をくみ出してこなければいけないんだよ。

もちろん、自分勝手な欲望が満たされないからといって、自分を不幸だと考えているような人もある。また、つまらない見えにこだわって、いろいろ苦労している人もある。しかし、こういう人たちの苦しみや不幸は、実は、自分勝手な欲望をいだいたり、つまらない虚栄心が捨てられないということから起こっているものであつて、そういう欲望や虚栄心を捨てれば、それと同時になくなるものなんだ。その場合にも、人間は、そんな自分勝手な欲望をいだいたり、つまらない見えを張るべきものではないという真理が、この不幸や苦痛のうしろにひそんでいる。

もつとも、ただ苦痛を感じるといふだけならば、それは無論、人間に限ったことではない。犬や猫でも、けがをすれば涙をこぼすし、さびしくなると悲しそうに鳴く。からだの痛みや、飢えや、のどの渇きにかければ、人間もほかの動物も、たしかに変わりが無い。だからこそ僕たちは、犬や猫や馬や牛に向かつて、同じくこの地上に生まれてきた仲間として、しみじみとした同感を覚えたり、深い愛情を感じたりするのだけれど、しかし、ただそれだけなら、人間の本当の人間らしさはあらわれない。

人間の本当の人間らしさを僕たちに知らせしてくれるものは、同じ苦痛の中でも、人間だけが感じる人間らしい苦痛なんだ。

⑤では人間だけが感じる人間らしい苦痛とは、どんなものだろうか。からだに傷ついているのでもなく、からだに飢えているのでもなく、しかも傷つき飢え渴くということが人間にはある。

一筋に希望をつないできたことが無残に打ち砕かれれば、僕たちの心は目に見えない血を流して傷つく。やさしい愛情を受けることなしに暮らしていれば、僕たちの心は、やがて堪えがたい渇きを覚えてくる。

しかし、そういう苦しみの中でも、一番深く僕たちの心に突き入り、僕たちの目から一番つらい涙をしぼり出すものは、——自分が取りかえしのつかないあやまちをおかしてしまったという意識だ。自分の行動を振りかえて見て、損得からではなく、道義の心から、「しまった」と考えるほどつらいことは、おそらくほかにはないだろうと思う。

そうだ。自分自身そう認めることは、ほんとうにつらい。だから、たいていの人は、なんとか言い訳を考えて、自分でそう認めまいとする。しかし、コペル君、自分があやまつていた場合にそれを男らしく認め、そのために苦しむということは、それこそ、天地の間で、ただ人間だけができることなんだよ。

人間が、元来、何が正しいかを知り、それにもとづいて自分の行動を自分で決定する力を持っているのでなかったら、自分のしてしまったことについて反省し、その誤りを悔いるということ、およそ無意味なことではないか。

僕たちが、悔恨の思いに打たれるというのは、自分はそうでなく行動することもできたのに——、と考えるからだ。それだけの能力が自分にあつたのに——、と考えるからだ。正しい理性の声に従って行動するだけの力が、もし僕たちにないのだったら、何で悔恨の苦しみなんか味わうことがあろう。

自分のあやまちを認めることはつらい。しかし、あやまちをつらく感じるといふことの中に、人間の立派さもあるんだ。「王位を失った国王でなかったら、誰が、王位にいないことを悲しむものがあるう。」正しい道義に従って行動する能力を備えたものでなければ、自分のあやまちを思つて、つらい涙を流しはしないのだ。

人間である限り、あやまちは誰にだつてある。そして、良心がしびれてしまわない以上、あやまちをおかしたという意識は、僕たちに苦しい思いをなめさせずにはいない。しかし、コペル君、お互いに、この苦しい思いの中から、いつも新たな自分をくみ出してゆこうではないか、——正しい道に従つて歩いてゆく力があるから、こんな苦しみもなめるのだと。

「誤りは真理に対して、ちやうど睡眠が目覚めに対すると、同じ関係にある。人が(⑥)から(⑦)で、よみがえつたように再び、(⑧)に向かうのを、私は見たことがある。」これは、ゲーテの言葉だ。

僕たちは、自分で自分を決定する力をもっている。だから誤りをおかすこともある。

しかし——

僕たちは、自分で自分を決定する力をもっている。だから、誤りから立ち直ることもできるのだ。

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』

(注) 動悸——心臓がはげしく脈をうつこと。

虚栄心——自分を実質以上によくみせかけようとする心。

悔恨——過ちを残念に思うこと。

ゲーテ——ドイツの詩人・小説家・劇作家。

問一——線部①の内容にもっとも近い意味のことわざを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 知らぬが仏 イ あつものにこりてなますを吹く ウ 苦しい時の神だのみ

エ 過ぎたるは及ばざるがごとし オ のどもと過ぎれば熱さを忘れる

問二 (②) に入る適語を「調和」に漢字一字を加えた漢字三字で答えなさい。

問三 (① ③) の中に入れる文としてもっともふさわしいものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 憎みあつたり敵対しあつたりすべきものだからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆけなくてはウソだからだ。

イ 憎みあつたり敵対しあつたりすべきものではないからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆくのはウソだからだ。

ウ 憎みあつたり敵対しあつたりすべきものだからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆくのはウソだからだ。

エ 憎みあつたり敵対しあつたりすべきものではないからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆけないのはやむをえないことだからだ。

オ 憎みあつたり敵対しあつたりすべきものではないからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆけなくてはウソだからだ。また、元来、もって生まれた才能を自由にのばしてゆけなくてはウソだからだ。

問四 筆者は、——線部④の内容を具体的な例をあげながら説明しています。それらをまとめた内容がしめされている段落(——線部④よりも前)の最初の五字(句読点をふくむ)をぬき出して答えなさい。

問五 筆者は、自分勝手な欲望が満たされずに自分を不幸だと考えたり、つまらない見えにこだわって苦労している人の背後に存在する真理を本文中から四十字程度で句読点もふくめてそのままぬき出して、その最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問六 ——線部⑤について、おじさんはコペル君に対して、人間だけが感じる人間らしい苦痛とはなんであると言っていますか、本文中から三十五字以上四十字以下で句読点もふくめてそのままぬき出して、その最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問七 本文最後に引用されているゲーテの言葉にある——線部の中の(⑥)(⑦)(⑧)に入る適語をそれぞれゲーテの言葉の中にある二字の語でうめなさい。

問八 この文章中の最後で、おじさんはコペル君にゲーテの言葉を用いながら「僕たちは自分で自分を決定する力をもっている」と語りかけます。この「自分で自分を決定する力をもっている」ことによつてどのようなことが結果として起こり得るとおじさんは言っていますか、本文中からそのまま句読点もふくめて二か所ぬき出して答えなさい。

問九 波線部「あやまちをつらく感じるといふことの中に、人間の立派さもあるんだ」について、なぜこのように言えるのですか、七十字以上百字以内(句読点をふくむ)で説明しなさい。

二 次——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

1 地震によつてダンソウができる。 2 カンソな建物で生活する。

3 神社ブツカクにお参りに行く。 4 メンミツな計画を立てる。

5 父は早い時間にツウキンする。 6 様々な思いがキヨライする。

7 ザツコクを食べる。 8 サクリヤクを用いる。

9 お顔を拝む。 10 自分の考えをを述べる。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

あと一年、来年の三月でこの県立南小沢農林高等学校は廃校になる。隣市の県立高校と統合されるのだ。彰浩たちを最後として、南小沢農林高校は新入生の募集を中止していた。隣市の、あるいは県外の高校へと中学の同級生の多くが去っていった。彰浩は逃げられなかった。中学三年の春、父が長年勤めていた製材所を解雇されたのだ。長兄も次兄も学生であることをあきらめて、働き始めていた。末の彰浩を地元の高校に進学させるだけでもかなりの負担だったはずだ。

「あんたが心配することはない。」

おれ、高校に行ってもええのかと尋ねた息子に、母の由美子は、一度眉をひそめ、それから①自分の胸をこぶしで叩き、はつきりと言いつつ切った。

「お前は小さいときから気を回しすぎなんよ。今日び高校ぐらい出たらんでどうするの？兄ちゃんたちだって、仕送りするて言うてくれてるんや。うじうじ変な心配せんときよ。」

いつもはうつとうしく、ときに恥ずかしくさえあった、大きな母の声に心を動かされてしまった。素直に頭を下げたくなる。

「けどな、もう野球できんようになるんかな、信吾ちゃんたちとよう言うてたやないの、高校行つても野球して甲子園に行こうぜつて。」

②「ああ…そんなガキの頃の冗談やから。」

「そうか…あんた本当はちゃんとした野球部のある高校いきたかつたんと。」

由美子はそこまで口を閉じた。言つてもしょうがないことを言葉にしてどうなる。

野球は好きだった、甲子園に行きたいと本気で望んだ時期もあった。中学の野球部の顧問が根っからの野球好きで、部員一人一人に丁寧な指導をしてくれた。技術を習得し身体を鍛え、自分が変化していくことをAように彰浩なりに実感できた。信吾や有一と野球漬けで過ごした中学も、去年高校より一足早く統廃合の波をかぶり、幕を閉じた。建物というものは、人の営みがあつてこそ命だと聞く。当たっているのだから、この頃南の山を背景に建っている中学校の校舎に近づく度に、③かすかな腐臭をかくような気がする。人の建てたものは時の流れの中で、人に捨てられたときから、息が止まり腐敗していく。今、自分たちが立っているグラウンドも、後ろにある校舎も、いずれそうなる。

「悪いけど、俺そろそろ帰るわ。」

日はまだ中天にある。ひらりと手を振つて信吾はかけだした。

「おい、信吾、待てよ。」

声をかけたけど振り向かなかつた。三人しかいないのだから、野球の練習と呼べるものなどではしない。それでも、午前中に集まり、二時間近く走つて、投げて、バットを振つて、汗を流す。それが緩やかな決まりになっていた。三人とも、諦めたものも捨てざるをえなかったものも数多くある。それでも、自分たちなりの野球をしようという暗黙の了解が存在し、今日も集まっていた。練習を切り上げるには、一時間以上早すぎる。

④「なんだあいつ。」舌打ちしてみる。

「信吾：病院じゃないか：おふくろさんが入院したつて：。」

マウンドから降りてきた有一がつぶやいた。

信吾は早くに父親がなくなり、母親と二人暮らしのはずだ。信吾の姿が消えた駐輪場に視線を巡らす。そこは、ただひっそりと暗い場所で、彰浩の目には闇以外何も捉えられなかった。

その夜、警察から電話があつたのは十時近かつた。テレビを観ていた。今日から甲子園では選抜大会が始まつていたのだ。本当は見たくなかつた。ニュースの中のほんの短い時間であつても見たくない。立ち上がりさつと自室にこもればいいのだ。なのに、彰浩は視野の片隅にテレビの画面を、職員の一部で選手宣誓やスタンドのどよめきをしっかりと捉えていた。どうにもならないことにこだわつて、こそそこ逃げ出そうとする自分が卑小で哀れな者に思える。自分には決して手の届かない場所を堂々と歩いているのは、同年代の少年たちだ。力及ばず届かなかつたのならまだしも、挑むことさえ許されなかつた。同じ国に生まれ、同じ年齢でありながら、自分と彼らの間には無限にも思える隔りがある。

「ほんま、格差社会やな。」ほろりと言葉がこぼれた。電話が鳴つたのはその時だつた。

電話に出た由美子の横顔から、Bの気が引いていくのが、はつきりと見て取れた。

「え：信吾ちゃんか：そうですか、はい、では、すぐに。」

「信吾がどないしたつて？」

「ようわからんけど、江草で喧嘩したとか。」

江草は西隣に位置する市だった。信吾の母の入院先も、たぶん江草なのだろう。信吾は陽気で調子にのりやすい性格ではあるけれど、短気でも粗暴でもない。喧嘩とは…。

由美子が運転する、軽自動車の後部座席で、信吾が小さくうめいた。

「痛いかな？」

「痛いか？」

⑤「おまえ、何で喧嘩なんかしたんや？」

「うん：、道を歩いていたら、向こうから、おっさん連中が来て：肩がぶつかつたんや。」

「うん、警察で聞いた。草野球のチームのおっさんたちがやつたんやろが。何か試合の後で一杯やって酔っぱらつてたつて。向こうがよろけてぶつかつてきたんやろ。」

「ぶつかつたやつが、舌打ちして『気をつけろ。イモが』つて言うたんや、それで：。」

「それだけか？」信吾がその一言だけで激昂したとは、とても思えなかつた。

「電気屋の前やつたんや：電気店の前でテレビに甲子園が映つてた。今日選抜やろ：別に、どうつてことないけど：何か急にいらつて：そこに、ぶつかつてこられて：。」

信吾が口をつぐむ。彰浩は、座席に深く座り直し、こぶしを握つた。存分に明るい陽光の下を誇らしげに歩くユニフォーム群が浮かぶ。挑むことさえ許されなかつた。

「信吾。」いつもよりゆつくりと丁寧な名前を呼んでみる。

「うん？」

⑥「明日も練習出てこれるか？」

返事の変わりに不鮮明なうめきが返つてきた。

翌日は曇り空だった。彰浩は簡単なストレッチの後、グラウンドを回り始めた。ペースを乱さぬように走る。グラウンドには彰浩以外誰もいない。「もう、止めようか。」足を止めようと視線を上向けたとき、校門に人影が見えた。二人だ。

「ごめん、遅れちゃって……おれ、信吾にいつも迎えに来てもらってたから……いつも、そうだったから……」有一が頭を下げた。

信吾が近づいてくる。

「練習……しよう。」有一がボールをつかむ仕草で、ゆっくりと指を握り込んだ。

問一 二重線部の「さえ」と同じ役割のものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 小学生がえ知っている。 イ 水がえあれば助かる。 ウ 行きがえすればよい。

エ 犬がえ食わない。 オ 雨は激しく、風がえ吹いてきた。

問二 [A]に入る、言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 風が木々を通り抜ける イ 雲間から光がさす ウ 雨が大地をぬらす

エ 砂地に水がしみこむ オ 波が全てをさらう

問三 [B]に入る漢字を一字で答えなさい。

問四 線部①の母の態度に対する思いをもっとも分かりやすく示した一文を文中よりぬき出して答えなさい。

問五 線部②の心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 甲子園など行く気もないが、子どもの夢を信じてくれている母の姿に感動している。

イ 負担をかけている親に、よけいな気をつかわすまいと、本心をこまかそうとしている。

ウ いつものように母親がうつつとうしい大声で話するため、早く会話を終えたいと思っている。

エ 甲子園に行くという自分の夢を言葉にされて、恥ずかしさから、ごまかそうとしている。

オ 言っても仕方のないことをくやみ、こだわり続けている母親に、あきれはてている。

問六 線部③のように感じる理由は、建物がどのようなものと考えられるからか。

「建物は」から。という形に当てはまるように、文中より二十字前後の部分をぬき出し、最初と最後の五字（句読点をふくむ）を答えなさい。

問七 線部④の心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お見舞いくらいあせらなくてもよいと考え、自分勝手に行動する信吾に対して怒っている。

イ 母親の病気のことをかくしているような水くささから、信吾のことが気に入くない。

ウ 自分たちだけでも頑張ってきた野球を、信吾が投げ出したような気がして怒っている。

エ 大した練習でなくてもやり通そうという固い約束があったので、信吾が許せない。

オ 自分も、いやいやながらも我慢して練習しているので、信吾のわがままが気に入くない。

問八 線部⑤に関し、信吾が喧嘩した理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 酔っぱらって歩いていた相手にこそ非があるのに、謝りもしなかったから。

イ 自分たちがぶつかっておきながら、その挙げ句ひどいことを言ってきたから。

ウ 肩がぶつかったくらいでも、プライドの高い信吾には許せないことだったから。

エ 甲子園に挑めないことへのいらだちが起きているところに、ぶつかられたから。

オ 同じ野球をしている人間としては、相手の醜態を許すことができないものだったから。

問九 線部⑥の言葉にある心情としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信吾の悔しさがよく分かるからこそ、同じ気持ちでいる友とあらためて野球をしたいと思う。

イ 信吾が怪我で、苦しうなので、明日の練習には来られないのではないかとという心配。

ウ 警察沙汰になった気まずさから、信吾がこのまま野球をやめるのではと、気が気でない。

エ 信吾が来なくなったら、自分までも野球を止めてしまう心の弱さがあり、不安である。

オ 信吾が来なくなってしまうと、有一や自分との関係も崩れ去ってしまうような気がしている。

問十 波線部における、彰浩の思いを、分かりやすく八十字以上百字以内で答えなさい。

受験番号	
氏名	
成績	

問九										問八		問七	問六	問五	問四	問一								
												⑥				問一								
												⑦				問二								
												⑧	}	}		問三								

二		
9	5	1
む		
10	6	2
べる		
	7	3
8	4	

問十										問七	問五	問四	問一										
													問一										
										問八	問六		問二										
										問九			問三										
											}												